

KYOTO
UNIVERSITY

京都大学 総合人間学部

数理・情報科学講座

人間・社会・思想講座

芸術文化講座

認知・行動・健康科学講座

言語科学講座

東アジア文明講座

共生世界講座

文化・地域環境講座

物質科学講座

地球・生命環境講座

総合人間学部が
変わりました

Faculty of Integrated Human Studies
2027



学部長挨拶

「学術越境」の目指すもの	1
総合人間学部の教育	2
講座紹介	3
入学から卒業まで	8
卒業生の就職先、アクセス	9



学部長挨拶



京都大学総合人間学部 学部長
人間・環境学研究科 研究科長

宮下 英明

総合人間学部は、平成4年(1992年)にそれまでの教養部を母体として設置され、平成15年(2003年)からは、同じく教養部を母体として平成3年(1991年)に設置された大学院人間・環境学研究科と一体化して運営されている学部です。京都大学においては10番目の最も新しい学部ですが、母体となった教養部は、明治2年に創設された舎密局(せいみきょく)に始まり、洋学校、第三高等学校を経て設立されており、他学部と異なる最も長い歴史を背景にしています。京都大学の「自由の学風」も、この第三高等学校が一つの源であるとされています。これまでに3千名を超える卒業生を世に送りだし、総合人間学部ならではのバランス感覚の優れた多様な卒業生が各界で活躍しています。

「総合人間学部」という名称は、本学部の研究・教育が、各専門分野に限定された個別研究・教育を超え、自然と調和した人間の全体的形成を目標とすることに由来します。学問が専門分野ごとに細分化され、深化してゆく一方で、社会の急激な変化に伴って、新たに生まれた、あるいは深刻さを増しつつある諸課題に果敢に挑戦していくためには、従来の学問領域の枠を超えて、異なる視点や方法論を組み合わせ、新たな知識や解決策を探求することが求められています。これに応えるため、総合人間学部は多彩な学際的アプローチや学術分野の垣根を越えて連携を深めてゆく「学術越境」を重視し、学生に幅広い教養と深い専門知識を提供しています。本学部の教員は、人文、社会、自然科学の広範な専門分野における学術研究に加え、京都大学の全学生に向け教養教育・基礎教育・語学教育の授業も担当しています。総合人間学部には「専門学術教育と高等普通教育」を柱とした第三高等学校の理念が、時代に即して発展しながら脈々と受け継がれています。

総合人間学部での学びは、他学部と大きく異なります。他学部での学びが、専門性を高めるための受動的な学びになりがちになるのに対して、総合人間学部では、自らを高めるための能動的な学びが求められます。知的関心の赴くままに自らが何を極めたいのかを本気で考え、必要となる知識を主体的かつ計画的に補い、そして自らの知的な核となる専門性を高めてゆく。さらに、ひとつの専門分野の枠組みに囚われることなく、柔軟で重層的な思考力を養うため複数の学問領域について学ぶこととなります。これらは決して容易なことではありませんが、総合人間学部の特徴を大いに活かし、自ら自分を育てることを期待します。

「学術越境」の目指すもの

総合人間学部改革の理念

沿革

- 1992年 10月 総合人間学部設置
- 1993年 4月 総合人間学部第一期生入学
- 2003年 4月 1学科5学系に改編
- 2024年 4月 1学科10講座に改編

前進し続ける総合人間学部

総合人間学部は2024年度より「学術越境」の理念のもと、10の講座からなる新たな形に生まれ変わりました。1993年度に第一期生を迎え入れた京都大学でもっとも新しい学部である総合人間学部は、つねに変革し前進し続けます。

学術越境の理念

文理にまたがり京都大学でもっとも広範な学問分野をカバーする総合人間学部は、あたかも一つの総合大学のようなのです。

その特性を生かし、「学術越境」という理念を軸に、学部を再編するに至りました。「学術越境」とは、教員、学生が自らの専門分野を極めつつ、学術的並びに社会的な問題解決のために積極的に他分野の知見を取り入れてゆくことです。総合人間学部で学ぶ学生は、専門分野の深く系統的な修得は当然のこと、専門だけに閉じこもらない柔軟で社会に開かれた学際的精神を身につけます。

既存学部の枠を超えた総合的な学問の場

総合人間学部は、科学技術の急速な発展や国際化の進展などによって急速に変化する社会に対応するために、人間とそれをとりまく世界を、今までの学問の体系にとらわれない学際的な観点から総合的にとらえようとする、「人間の学」構築を目標とする学部です。学際的な視点を持ち、各界で創造的に活躍できる人物を育成しています。

他者とのコミュニケーション能力の育成

「学術越境」は専門を異にする他者との真剣なコミュニケーションを前提とします。既存の学問分野にとらわれない学際的で広い視点をもつ「学際知」の育成とともに、専門を他者にわかりやすく伝える「教養知」の育成が目指されています。他者に伝える試みは専門に新たな着想をもたらす貴重なきっかけにもなります。

総人が育成する人材

総合人間学部は、新たな「人間の学」の創出を主軸とする学部ですが、この学問的追究を通して、高い倫理性と幅広い視野から創造的かつ持続的に現代の諸問題と向き合い、多様な人々と協働しながらリーダーシップを発揮する人材を育成することを目的としています。多様な学問分野を網羅する教員陣のもとで、教養教育・基礎教育と専門教育を体系的に一体化したカリキュラムを提供します。

総合人間学部の教育

文理を超越する多様な専攻の選択が可能

受験生の皆さんは大学の授業に触れたことがないため、入学後専門とする学問について必ずしも深い理解をもっているとは限らないでしょう。そのため、受験学部の選択は受験生にとって大きな悩みの種かもしれません。その点総合人間学部では、入学後選べる専門の幅は文理をまたいで本学他学部にはない広さに及んでいます。入試の際の〈文系・理系〉の別にもとらわれないで選択が可能です。入学後、広く各分野の授業を履修し、実際に学問に触れてから、じっくり専門を選べるのが、総合人間学部の大きな特徴です。

幅広い視野と創造性を育む副専攻制度

総合人間学部では専門分野ではない特定の他分野を副専攻として選んで系統的に履修する、副専攻制度を設けています。その目的は幅広い視野と豊かな創造性をもつ人材の育成にあり、主専攻で培う高度な専門性に並んで、他分野の深い知識と素養を身につけることによって、複眼的な視点と学術越境の精神を育むことを目指しています。

ユニークな試み「研究を他者に語る」

「学術越境」は専門分野を異にする他者との真剣なコミュニケーションを前提とします。総合人間学部は他者に専門をわかりやすく伝える力の育成を図る「研究を他者に語る」というユニークな取り組みを行っています。卒業論文執筆後に、論文で扱ったテーマを他分野教員や他学生に分かりやすく説明するという試みです。分かりやすく説明する努力は自らの理解を相対化し、深めてゆくきっかけになります。この試みは学生にとって卒業間際の意義深い経験になります。

大学院人間・環境学研究科への接続

総合人間学部の学びは、総合人間学部の大学院である、大学院 人間・環境学研究科に直結しており、例年4割程度の学生が進学します（本学の他研究科や他大学の大学院への進学も可能です）。人間・環境学研究科には総合人間学部の10講座にそれぞれ対応する10の講座が設けられており、学部時代と同一の教員の指導の下でシームレスに専門を継続的に学修し、深化させることが可能です。

1

数理・情報科学講座

数理学において、主に解析的な手法を用いて、さまざまな現象の変動過程の数理構造の解明をめざすとともに、情報科学において、理論と応用の両面から探求を行います。数理学においては、常微分方程式、偏微分方程式、確率微分方程式、確率過程、離散力学系、複素力学系、カオス・フラクタル理論などを用いて記述されるさまざまな数理的現象を解析します。情報科学においては、人工知能、機械学習、データサイエンス、メディア情報処理についての理論と応用、またパズル・ゲームの数理、量子計算などの諸問題について探究します。さらに、プログラミング言語理論、数理論理学、証明支援系、圏論、記述集合論などを通じて、計算の本質、特に数学の中に現れる計算概念に関して追究します。



図1：4次元ドームの制作

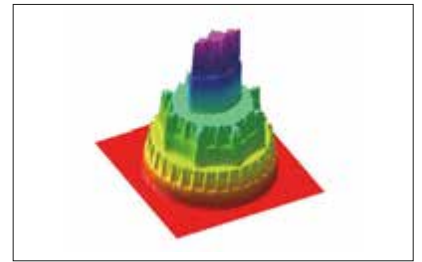


図2：フラクタルウェディングケーキ(ランダム複素力学系のオブジェ)



図3：形式的証明からプログラムを抽出する研究



図4：深層学習に基づくテニスラケット先端位置の追跡

2

人間・社会・思想講座

人間は世界や他者、そして自己自身と関わりつつ社会を構成して生きる存在ですが、言語も思想も人間の産み出したものとして事後的に付加されるだけのものではありません。それらはむしろ人間自身と社会との関わりを根本から規定し、性格づけるものです。当講座は、言語と思想を持ち社会的な存在でもある人間、および人間と社会との相互交渉について、根源まで遡って原理的な究明を行います。また、原理的な究明を踏まえて個別の社会のあり方や社会内の人間の具体的な行動や発達の詳細、さらには病理的なあり方まで視野に収めて実証的研究を展開するとともに、その研究の実践への応用を試みます。



図1：動物倫理



図2：国際シンポジウム



図3：授業風景



図4：東日本大震災:被災者の語りを聴く

3

芸術文化講座

本講座は、イギリス・アメリカを起点として世界に広がる英語圏文学、ドイツ語圏、フランス語圏、イタリア語圏など、多言語文化を基盤とするヨーロッパの文学、さらにはヘブライ文学を視野に入れ、芸術の本質と未来の可能性を探求します。小説、詩、演劇などの文学作品から映画、舞台芸術、音楽、美術まで、様々なジャンルの創造行為を対象とします。文化的・社会的・思想的背景に留意しつつ、個々の作品をダイナミックで立体的なものとして浮かび上がらせるため、文芸批評、演劇理論、映画理論、芸術哲学を学びます。ローカル・グローバルの両側面に光を当てることによって個々の作品の特殊性と普遍性を解明し、異なる文化の共生を模索します。



図1：シェイクスピア作「冬物語」、韓国・順天郷大学との共同英語上演於）人間・環境学研究科棟地下講義室



図2：映写機 牧野教育活動写真製作所製(1921年頃)



図3：フランツ・ヒュンテン「ピアノ教本」作品60第3版(1833年頃)の口絵



図4：ジェイムズ・ジョイス像(チューリヒ (Zurich, Switzerland) フルンテルン墓地)

4

認知・行動・健康科学講座

認知・行動・健康科学講座では、神経科学、認知科学、心理学、生理学、運動科学、健康科学、運動医科学、精神医学などのさまざまな学問を基盤として、精神と身体が担う諸機能のメカニズム、発達過程、形成方法に関する基礎的研究と、健康づくりやスポーツ活動に関する実践的研究を行います。さらに、加速する情報化社会、生命・文化の多様化、人と機械の共生のあり方など、社会の変化にともなう人類の諸課題についての総合的な研究および実践活動を展開していきます。これらの成果をもとに、人類が生命活動・健康・発達をより良く実現していくための方策と手段を探求します。

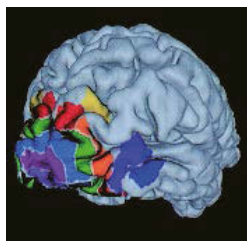


図1：視覚の脳地図



図2：行動観察と発達支援



図3：月面歩行を模擬した動作中の筋活動と動作

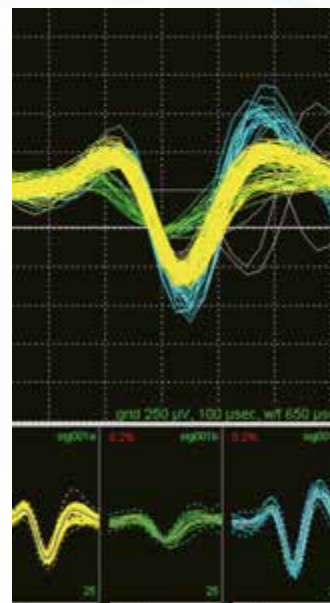


図4：神経細胞の電気活動

5

言語科学講座

言語は人間の最大の特質であり、さまざまな知的な営みに欠かすことのできないものです。本講座は、理論言語学、記述言語学、応用言語学(教育・習得)の各領域を中心として、多角的に言語の本質を理解するための研究を展開しています。理論言語学の領域では、生成文法、認知言語学といった理論を用いて、言語の文法や意味、人間の認知能力を明らかにしようとしています。記述言語学の領域では、さまざまな言語の歴史的・地理的な変異や変種を調査・比較し、言語の普遍性と多様性を探求しています。応用言語学の領域では、外国語習得のメカニズムやプロセス、外国語教育の課題や制度などを、認知的・心理的・社会的観点から研究しています。

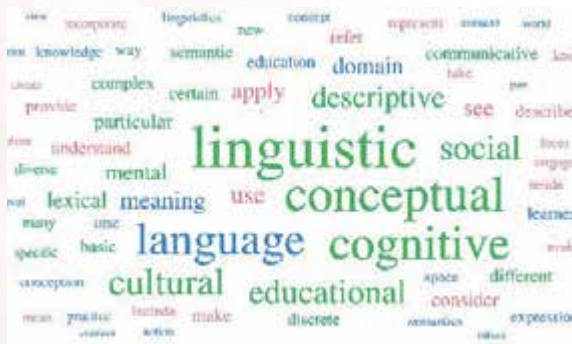


図1



図2：アメリカの空港の保安検査場での多言語表記

6

東アジア文明講座

東アジアの諸地域は、各地域が独自の文化を発展させるとともに、地域間の活発な交流によって、全体として大きなまとまりをもつ政治圏・経済圏・文化圏を作り上げてきました。この講座では、日本語学・日本文学、中国語学・中国文学、日本史・中国史、中国思想・朝鮮思想といった専門研究領域を基礎としながら、これらの学問領域を融合させて、東アジア諸地域で育まれた言語・文学・歴史・思想を縦横に研究し、西欧文明とは異なる東アジアの歴史・文化・社会を総合的に解明することを目指します。



図1：『資治通鑑』を読み下した朝鮮時代の句吐資料(左)と『万葉集』巻六の透写資料(右)



図2：皇帝陵をまもる石獣
(中国江蘇省丹陽市郊外の梁・簡文帝莊陵にて)



図3：観光客でにぎわう南京の中山陵(孫文の墓)

7

共生世界講座

持続可能な共生世界・共生社会の実現の可能性とその難しさに向き合いながら、共生の上に成り立つ新たなコミュニティの構築に向けた社会制度・社会関係のあり方を、多元的に考究します。そのために、本講座では、国際関係・外交関係、世界の諸地域の歴史・社会（アメリカ・ヨーロッパ・インド・中東・アフリカ等）、経済・資本制システム、環境・資源、移民、労働関係、公共政策・民主主義、メディア、憲法・司法システム等、幅広い事象に着目します。政治論・政策論・外交論・経済論・環境論・法律論・社会論・歴史論・思想論等を、領域横断的に相関させることにより、上記目的に寄与する総合知を創出します。また、それを実践し、活用できる人材を育成します。



図1：ロサンゼルス・リトルトーキョーの壁画



図2：英国議会議事堂時計台

8

文化・地域環境講座

長い歴史のなかで育まれてきた固有の民族・文化・地域・空間・景観の特性や居住の諸相を「文化・地域環境」として捉え、その生成、展開、保全の諸過程や現状を解明する講座です。文化人類学、建築学・都市計画学、人文地理学といったフィールド研究にもとづく学問分野を横断し、文化・地域環境に関する基礎研究と実践研究を統合した研究教育を行っています。都市開発やまちづくり、地域活性化、文化遺産・景観の保全と活用、異文化・地域間交流、地域課題の解決に資する実務者・指導者・研究者を育成します。



図1：明治12年の大阪市街地図(部分)



図2：ラオスでインフォーマントとともに稲刈りをする調査者



図3：長浜市の町家での調査報告会

9

物質科学講座

当講座では、物質の基本構成要素である電子・原子をはじめ、 H_2 や CO_2 などの小分子から、より複雑な有機・生体分子や3次元固体物質まで、サイズや次元が異なる多様な物質系について、次のような研究を進めています。

1) 新しい有機分子、ナノ材料、固体触媒、電池材料、分子性結晶、光機能性材料(図1)の創成と機能の探求、2) 質量分析、核磁気共鳴、光電子分光(図2)、X線吸収分光、発光分光、トンネル顕微鏡などの各種分析・測定手法の開発、3) 高温超伝導、強相関電子系、冷却原子系、低次元物質などの新奇物性現象の発見と発現機構の解明、4) 光触媒・光熱変換触媒(図3)、燃料電池、光機能性材料などのエネルギー変換機構の解明

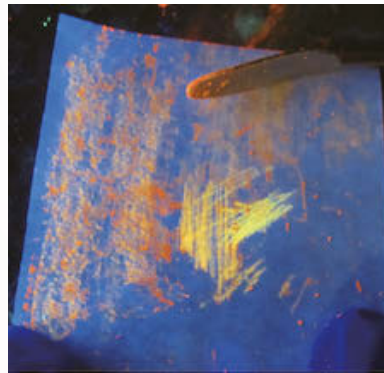


図1：擦ると色が変わる色素

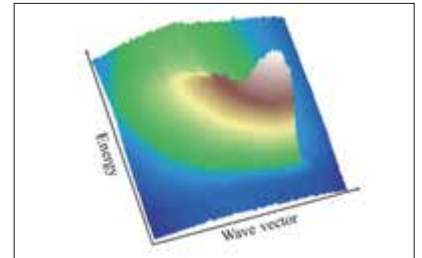


図2：光電子分光で測定された高温超伝導体の電子構造



図3：太陽光利用を目指した光熱変換触媒の実験

10

地球・生命環境講座

自然と人間とがよりよく共存できる関係の構築のために、宇宙や地球の過去・現在・未来、地球の内部や表層と生物達との関係や、生物の機能解明を目指した研究を行います。地球物理学、地質学、古生物学、地球化学、惑星科学などの知識と手法を使って、惑星や衛星のできる過程、地球の内部や表層の動き、物質や環境の変化を調べます。また、生物同士の関係を調べることによって、多様な生物が共存する仕組みや生態系の安定性を探究します。さらに、生物が環境に適応したりエネルギーを取り入れたり変換する方法や、生物を含む自然の資源を健全に利用するための方法を追究します。

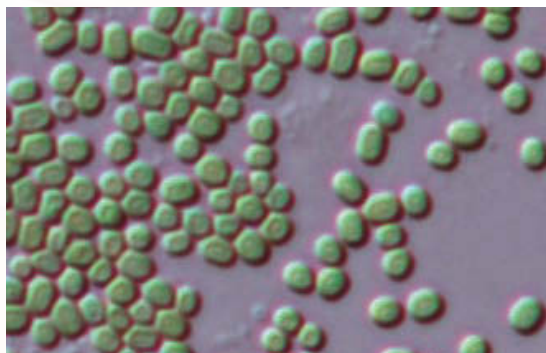


図1：光合成により酸素を発生するシアノバクテリアの一種



図2：三重県菅島の蛇紋岩体の露頭と蛇紋岩植生



図3：中新世の化学合成生態系に見られる貝類の化石

入学試験(120名)

一般選抜(前期日程)

第1段階選抜は、大学入学共通テストの成績等により行います。

第2段階選抜は、文系型試験(定員62名)と理系型試験(定員53名)に分けて行います。

特色入試

提出書類、能力測定考査、及び大学入学共通テストの成績を総合して選抜(定員5名)を行います。



専攻の決定

総合人間学部は本学他学部に見られない、文理にまたがる広い学問分野をカバーしています。一般選抜「文系」または「理系」、特色入試「総合型選抜」という入学試験のどちらかで受験したかにかかわらず、本学部学生はその幅広い分野をカバーする諸講座のどれにでも進むことができます。ただし入学後1年間は、どの講座にも属しません。幅広い学問分野に触れ、自分の専攻したい学問分野をじっくり見極めた上で、2回生進級時に主専攻を決めて、講座に属します。専攻分野をこれほど広い範囲から選べる学部は、本学ではほかにありません。



副専攻制度

総合人間学部では、広い視野を持ち創造性豊かな人間を育成する目的で、主専攻のほかに、副専攻の制度を設けています。副専攻は、各自が所属する講座の専門分野以外の特定の学問分野を系統的に履修する制度です。これによって、主専攻以外の分野においても専門的知識と深い素養を身につけることができます。副専攻を修得したことに対しては、学士の学位記とは別に副専攻名を記した認定書が発行されます。



卒業論文・卒業研究と「研究を他者に語る」

4年間の学修の集大成として、指導教員の指導の下、卒業論文あるいは卒業研究の作成がなされ、その発表会がもたれます。またこれとは別に、その研究成果を自分の専門分野とは異なる分野の複数の教員や学生に対して説明することが義務づけられています(「研究を他者に語る」)。専門外の人に自分の専門をわかりやすく語ることが総合人間学部の教育では重視されていますが、この課題はその総まとめといえます。卒業時のこれら諸課題を完成することで、学生は専門分野の研究・理解の力を養うとともに、深い思考力を身につけ、専門外の人々への説明の能力を培います。これらの能力は、卒業後の人生の頼もしい武器になることでしょう。



卒業後の進路

大学院進学

総合人間学部の大学院進学希望者の多くは、直結する「人間・環境学研究科」を受験して進学しています。

2024年度からの総合人間学部の組織改革により、総合人間学部は10の講座に再編され、それによって人間・環境学研究科の10の講座と対応するようになりました。その結果、学部と大学院でのシームレスな学習・研究が可能になりました。

なお、本学の他の研究科や他大学の大学院に進学することもできます。

就職

総合人間学部の卒業生は、主専攻の履修だけでなく、副専攻の履修や、幅広い分野の学部科目を履修することにより、広い視野と柔軟な思考力を備え、総合的な判断力を身につけているものと、社会から期待されています。また、卒業生は、のびやかな個性と独創性が高く評価され、文系から理系に至る幅広い職種に就職して、その社会的期待に応えています。国家機関、国際機関、地方自治体、民間企業等での活躍の道が、大きく開かれています。



京都大学総合人間学部

2026年4月1日

発行 京都大学総合人間学部
〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町
TEL 075-753-6506. 6507 (学部教務掛)
FAX 075-753-7874
<https://www.h.kyoto-u.ac.jp>
